

インタビュー

わが生い立ちの記——少年・青年時代——

2024年8月11日

奥田 昌道

(インタビュー) 市村今日子

生まれは東京の牛込区赤城下町 幼稚園から大阪市の八尾に定住 腹違いの兄 男女共学の八尾高校での出会い 「ノート物語」 子どもの頃 草野球と体操 鉄棒とランニング 窪田君という大きな存在 松浪先生との出会い 於保不二雄教授の後継者に オズボーンの大集会 七夕の夜の市川喜一君 ヴィントシャイトのドイツ民法典 フンボルト財団留学生としてドイツへ『キリスト道講話集』第一巻 母親を白浜温泉旅行へ 祈り

●生まれは東京の牛込区赤城下町

(市村) 先生のお生まれと家族構成とか、家族の中でも特に影響を与えたお母さんとか、お祖母さんとか、小さい頃の友人の話とか、育った環境、当時の時代、小学校・中学校・高校のときに熱中したこととか。その中で、今思うとあの時にこう考えたから今の道がこうなったとか、信仰に繋がったのはあの時の出来事だったというようなこととか、お話しいただけたらと思います。

(奥田) 私の生まれは、東京の「牛込区赤城下町34番地」と戸籍には載っております。その頃、父は証券会社に勤めていた。証券会社の社員だったので、東京に滞在していたようです。そういう東京時代は、私の三歳くらいまでですから、生まれたのは赤城下町ですけども、ほとんど記憶がない。なにか、「めかまでんしゃー！」なんて叫んでいたというようなことを聞かされている。その頃は、父は早稲田大学の商学部出身だったので、早慶戦なんかには、どうも神宮球場やなんかに連れて行ってもらったらしい。「そこで迷子になったことがあった」というようなことを聞かされて、ああそうかなという感じなんです。自分で思い出に残っているのは、部屋の窓越しで窓枠をもちながら、「めかまでんしゃー！」と叫んでいたようなことを聞かされるから、それが自分の影像として残っている。多分、目黒と蒲田間^{かまた}を走っている——今でいうと東急線になるかな——電車です(目黒蒲田電鉄、現在の東京急行電鉄の前身)。

家族構成は、ちよつと複雑になるけれども、もともと親父が、親父の家の次男なんです。長男が本家を継いでいて、次男だから東京へ出掛けて早稲田大学の商学部なんかを勉強させてもらって、それも学資を家のほうからいろいろ注ぎ込んでもらったのを、親父はどうも人の前ではいい格好をしたがって、パーパー使ったんでしょかね。それで結構もてるような生活をしたらしい。



（市村）早稲田大学に入れていただけるといことは、本家は裕福だったのでしょうか。何かご商売をしていたのでしょうか？

（奥田）何をしていたのか、それは全然聞かされていない。早稲田は、初め高等部からきて、それから大学がある。高等部へ入っておけば、そのまま上へあがれるという。それで早稲田の高等部のほうから入って、早稲田大学まで多分行ったのだと思います。大学を出て証券会社に——「角丸証券」とか聞いたかな——勤めていたらしい。ところがそのあと、私の三歳頃だと思っただけなんですけれども、大阪へ帰ってきました。大阪が一応、本家というかな本籍地なんです。戸籍を調べたら、「大阪市東成区」と書いてあったので。もともと親父の故郷は、山田村と聞いている。今でいうと富田林とか、あつちのほうになる。僕はそこに行ったことはないけれども。住んでいたのは、大阪市の東成区という所にしばらく住んでいたらしい。それからあとまた、布施あたり——今の東大阪市あたり——に住んでいたらしい。その頃、親父は住居を転々としていたような感じなんです。

●幼稚園から大阪市の八尾に定住

一番定住するようになったのは、そのあと私の二年保育の幼稚園に通うということ、近鉄沿線の——奈良線というのと、宇治山田の方へ行く二つのルートがあるけれども——その宇治山田の方へ行く線の、出発点は上本町という所で、それから布施という所があつて、布施で奈良線と宇治山田へ行く線が別れていて、布施から各駅停車で五つ目位に久宝寺口という駅があつて、その次の駅が八尾という。八尾駅だったら準急なんかは停まつたりするけれども、私の久宝寺口は各停しか停まらないという田舎です。その久宝寺口という所に、これは借地上建物ですね、その建物の所有者にはなつたけれども、借地ですから、地主さんに借地料を払っていたらしい。そこに住むようになったのが、私の幼稚園の二年保育の始まる年だった。ちょうど私の家の向かいが幼稚園だった。それで便利だということもあつたんでしょう。そこへ二年保育で入って、それから小学校は八尾尋常小学校、それが直ぐ国民学校というふうに名前が戦時中に変わる。今もあります。そこへ子どもの足で15分位は徒歩で通うのに時間がかかりましたけど、そういう所に住みました。住所名は、「八尾町穴太401番地2」という、そういう所に住んだ。幼稚園からずうつとあと京大に行っている間もそこが住居だった。京大のほうは、下宿したりしましたけれども、高校まではそこが育ちの場所、そこから八尾中学、それから中学が新制度になって高校に切り替わる。今も、八尾高等学校というのがあります。

この八尾高等学校は割に文武両道というのをモットーにっていて、そこからなかなか優れたスポーツ選手も出ている。その八尾高校で一番スポーツ選手で活躍したのは、



私の一年上に窪田正弥^{まさみ}という体操の選手がいて、これは高校時代にナンバーワンを争っていた優れた選手だった。器械体操というのはマット運動、鉄棒、平行棒、跳び箱とか、そういうものの選手で、秋田県の能代^{のしろ}高校に小野孝というのがいた。「小野に鉄棒」と言われるくらいに鉄棒の名手だった。秋田能代高校の小野孝と八尾高校の窪田正弥という、この二人が高校時代のライバルで、どっちも体操選手でオリンピックへ行きました。ちゃんと優勝も果してきました。そういうのが一年上にいまして、僕はその窪田正弥君と、なにかどういうご縁か、非常に仲良くなりまして、そのお家に泊めてもらったこともありまして、高校時代のいうならば自分の人生の相談相手でした。

●腹違いの兄

ちょうど一つ上にうちの兄貴がいて、この兄貴というのは腹違いの兄弟ということになる。というのは、親父の最初の奥さんが兄貴のお母さんであるんだけど、兄貴を昭和6年8月6日に産んで、そしてすぐ四日後の8月10日に亡くなっている。

（市村）お父さまの最初の奥さまが亡くってしまったんですか。

（奥田）親父は最初の奥さんと随分うまも合って仲よかったらしいんですよ。ところが、そうやって子どもを8月6日に産んで10日に亡くってしまった。そのあと乳飲み子をかかえて親父一人ではどうにもなりません。だから、大変だからといって、私の母親が——亡くなった方のお姉さんになるわけですが——嫁にきた。

私の母親というのはものすごく勉強が好きで、当時の——日本女子大ですね——専門学校だったと思うけれども、わざわざ大阪の布施という田舎から、そういう東京の学校へ単身で、もちろん下宿生活というか宿舍生活となるんでしょうけれども、そういうふうには物凄く勉強好きだった。英語ができたので、その英文科に入るようになって、それで日本女子大の英文科をちゃんと卒業して——それは昭和3年位の頃だと聞いてます——母親はもともと学校の先生になりたかった。ところが、その昭和3年頃はちょうど非常な不景気だったそうです。全然、就職口がないというので、もう東京はあきらめて、自分の本家へ帰ってきた。帰ってきたら肩身が狭いわけです。東京へ行って東京で就職してという、「そんな約束で行ったのに何たるざまだ」ということで、周りから非難されるわけです。それですごく肩身が狭かったと聞いてます。その時に、私の兄貴が8月6日に生まれて、母親が10日に亡くなったという事で、いわばその私の親父の所へ嫁ぎに行つてやれと、押しつけられたわけです。

（市村）妹が亡くなってしまったので、そのお姉さまが先生のお母さまになるわけですね。（奥田）そうなんです。私の聞くところでは、初めの奥さん、つまり私の兄貴の母親ですね、それと親父とはよくうまが合ったらしい。ところが、私の母親というのはな



にせ英文科に行つて、ヨーロッパになじんでいるわけです。親父は生粋の日本人なんです。そんな英語なんて大嫌いで、全然合わない。だから、本当に私の母親は辛かっただろうと思う。初めの奥さんというのはそんな知的ではなくて、どっちかというところ、私の母親はやはりそれなりにしつかり勉強して学校の先生をしたくらいに思っていたんですから。しかも、趣味は英文学でしょ。親父は生粋の日本人で、英語なんてクソクラエぐらいに思っていたから、合わないわけです。だから、お袋は非常に苦労したと思う。ただ救いは、親父のお母さんという方が——私からいえばお祖母^{ばあ}ちゃんになりますけれども——その方が物凄く理解して私の母親をかばってくれた。それが本当に救いだったと私は思います。私からいったら、「ありがとう」という感じのおばあちゃんなんです。ちよつと子どもから見たら恐いおばあちゃんだつたけど、そうやって私の母親に対しては物凄く後ろ盾になつてかばってくれた。これは私はずっと恩義を感じてきましたね、そのあと。

私が中学・高校から英語を好きになつたのはやはり母親がいろんな本を残してくれた。ちよつと普通の中学・高校生よりも一段と上の勉強が自修できるような——山崎貞という人の『自修英文典』とか——そういう普通の人を読まないような専門書があつて、それがそばにあるから、せつせつと自分で勉強しているから、いわゆる中学・高校で習う水準よりもちよつと上をいつていた。私はそれを自分でも憶えています。私は母親に、

「私は英文の方で道を立てたい」

と言つたら、母親は

「英文では食べていけない。あなたはもつと社会的に受け入れられる専門を選んで、

英文学を趣味にしたらいい」

と言つてくれた。それで私は

「じゃ、そうするよ」

と。もう一つ私の進路に影響を与えてくれた先生がしまして、それはちょうどまだ旧制の中学頃ですね。

まあ私の生い立ちから言いますと、小学校三年の時に太平洋戦争が始まつた。それで六年生で今度は中学受験なんです。その頃は、府立中学は全部一斉に受験なんですけれども、それが3月14日に指定されていた。昭和20年ですよ。ところが、その年はまず3月9日、10日は東京大空襲で東京は全部やられた。あの頃の空襲は焼夷弾でやられるから全部焼け野原になる。凄い犠牲者が出ている。そして、大阪は13日、14日なんです。大阪市は焼夷弾で全滅です。ちよつと、私の受験日は、府立中学の受験が3月14日と指定されていた。そんな受験どころじゃないでしょ。それで府の方針で試



験中止、全員合格となった。それで非常に迷惑したのは、

「お前らは無試験入学だから出来が悪い」

と、しょっちゅう教師に言われる。こっちのせいではないじゃないですか。こっちだって、まともな試験されても合格するだけの実力があるから小学校は送ってくれる。そうでないと、小学校は受験させないんですよ、自分のところの小学校の名誉にかかわりますから。それを「お前らは無試験入学で出来が悪い」とは、何たることを言うんだと、こっちは憤慨ですけど、まあ口には出せない。そういう時代です。

だから、中学は無試験、それから制度が新制に切り替わる。そうすると今度は、今まで旧制中学は4年制・5年制で、早い子は4年済んだら旧制高等学校の受験資格がある。ゆつくりいく子は5年終わってから、また高校受験するというルートがあった。ところが、私の時にはそういう制度は棚上げにして、新製の制度が始まった。それが新制中学が3年・高校3年という6年制です。

●男女共学の八尾高校での出会い

それだけではない。非常に大事なことは、私たちの時から男女共学が始まった。これが決定的に大事なんです。というのは、私の奥さんとそこで知り合った。

(市村) ちよつと、話が戻ってしまつてすみませんが、さきほど空襲で大阪は全滅みたいなことを仰ったけど、先生のお宅のほうは？

(奥田) 僕のいた八尾のほうは田舎ですから、もともと空襲を受けるような場所ではなくて、時たま爆弾が田んぼに落ちたりとか、たまにありますけれど、向こうの空襲の目的地ではないわけです。大阪市内——東京なら東京市内——が全滅ですけど、田舎は向こうにしたら問題じゃない。

(市村) お父さまは戦争にとられなかったんですか？

(奥田) 親父は中耳炎かなにかやってまして、徴兵検査で不合格になったので、戦争に行かなくて済んだんです。

(市村) さっきの共学の話にまた戻しましょう。

(奥田) 中学の試験が、大阪は全員無試験入学ということになりました、それで今度は男女共学という話になる。その共学はどうやって決めるかというと、近鉄線が走ってまして、線路のこっち側に住んでいる男も女も同じ八尾高校です。それから線路の向こう側に住んでいる者は——八尾女学校がもとと前身である山本高等学校というんですけど——そういう高校で共学という。近鉄電車の線路のこっちと向こうで違うようになる。それで、私はこっち側ですし、妻もこっち側だった。だから、同じ高校で、私のほうは八尾中学が八尾高等学校になるわけで、妻にしたら、八尾女学校がなくなつて向こうへ行つてしまったから、こっちの男の学校へ入り込まなければいけなくな



った。それで何に困ったかというところ、トイレですよ。男の学校はトイレなんて大のほうは時たま使う程度だし、ところが女子にしたらしょっちゅう使うわけでしょ。だから、それが一番困ったと言っていましたね。まあそんなところから始まるんですよ、便利とか不便とかが。

そういうふうにして、線路のこっちと向こうで高校がちがう。ちょうど、こっちだったからそこで知り合った。しかも、私が知り合ったのは高一の冬休みなんです。知り合ったというよりも、初めて存在に気づいたというのは、それは何かというと、ちょうどその頃、あれは九州の福岡かな、どこかあつちのほうにお家がある英語の先生で藤本という素晴らしい先生がいて、その方が冬休みの八尾の宿直室に泊まって年を越された。その藤本という先生が——我々の一年上に非常に勉強の好きなやつが何人かいました、そういう者の発案で——英語の教室をやってくれた。自分はこっちへ残ってね。そこでテキストに選んだのが、「Little Women（若草物語）」です。そういうものをテキストにして、上は三年生、私は一年生、そういう学年を問わず、熱心な生徒は誰でも参加していいということで、私は非常に勉強が好きだから進んで応募しました。そこにうちの奥さんが来ていた。でも、奥さんは女のお友だちが、

「二人では嫌だから、あんたも来てよ」

なんて言って引つ張り込んで、自分は勉強する気がないのに来た。でも、そうやって女子学生が二人だけいたから、こっちにしたら目につきますよね。まあそれがなりそめの、こっちにしたなら——向こうはこっちのことを知らないけれども——こっちにしたらちよつと意識する。

次に二年生のときに、あの時はホームルームというのが中心でいろいろあるんですけども、それ以外に、英語にしろ数学にしろ社会や何にしても全部選択制になっていて、選択制では科目毎に教室が違う。私が属した数学の教室は進学組のほうだから、微分積分とか難しいことをやるクラスなんです。そこへ女子のほうで大学へ行きたいやつが一人か二人か、勉強好きな子が来たんですけれども、その中にどういうことかうちの奥さんがおったんです。うちの奥さんは、自分で大学へ行く気もないのに、そういう数学なんかが好きだった。それで来ていた。それでこっちもちよつと目にとめるようになって、しかも私の横に座っていたかな。

うちの家内というのは、たとえば世界史の授業なんて専門でない先生が教える授業は全然おもしろくない。では何しているかといったら、机の下に本を隠してしゅっちゅう読んでいる。何を読んでいるかというところ、太宰治の小説なんかを読んでいる。それでいながら、試験になったら成績がいいんです。この子は変わった子やなと思った。

それともう一つ、全く私にとってはカルチャーショックですけども、私なんかは中間テストとか期末テストがあったら、そのあと必ずキャッチボールとか何とか、そう



いうスポーツをやって、いわば鬱憤を晴らすとか、それまで根づめて勉強したのを気晴らしする。ところが、うちの奥さんたちは、解放されたら大阪市内へ出掛けて映画館へ行く。二本立て三本立ての映画を観て、そういう遊び好きだった。遊び好きだけれども、成績だけはけっこういいんですね。ということは、自分でまともな勉強しないでも行けるんですね。だって、ノートなんてとったことがない。

●「ノート物語」

それで、「ノート物語」もありましてね。それは何かというと、私が自分で断片的にメモをとっていたのを整理してきれいなノートにしてプレゼントする。そうすると、うちの妻の家というのはお菓子屋さんなんです。しかも、まあ田舎ですけれども、ここはメインのストリートで店を開いている非常に開かれたお家なんです。いうならば、銀座通りですわ、八尾の村の中の。その銀座通りでお店を構えて、二階に広々とした部屋があつて、そこで女子生徒たちが集まって受験勉強をやる。受験勉強をするのに、うちの奥さんは紙切れしか持つてへん。メモしかね。で、僕がきちんと出来上がったノートをプレゼントする。僕自身は勉強せんでもわかつている。でも、それをきれいにノートに整理して、貢^{みつ}ぎをするわけです。そうしたら、妻のお友だちがそこに寄ってきて、お菓子は階下においてきたらお店があるから、そこからお菓子をつまみだしてはボリボリお菓子を食べながら、僕の提供したノートで勉強する。そういうことだったんです。こつちにしたら、ハートを捕まえたいということでした。

（市村）奥様のほうが先生に夢中だったというふうに聞いたような気がしたんですけど？

（奥田）いや、そんなことはないですよ。

（市村）先生と相思相愛だったとか？

（奥田）むしろこつちのほうが意識していたと思います。お店も相当大きなお店だしね、男友だちも結構いたんですよ。ドライブに連れて行ってもらったりとか、そういう友だちも結構いた。だから、僕からしたらライバルがいっぱいいる。こつちには何もなわけです。見せるものはノートしかない。結構、もてたみたいなんです。自分は意識してないんですけども、男のほうからしたらやつぱり、ある程度は意識してドライブに連れて行ったりとかいろんなことをやっているわけです。

あの頃は女子生徒で大学へ行くのはごく例外なんです。よほどでないといけない。普通は高校が終わったら、すぐ就職する。うちの奥さんは地元の富士銀行ですね——今は大和銀行に変わったか何か知らんけれども——その頃、富士銀行の八尾支店というのがありまして、そこへちゃんと就職が決まっていたみたいなんです。ですから、自分としたら全然進学組とは関係ないわけですけども、そういうことなので、予定通りちゃんと富士銀行へすぐ入行して、銀行員としていわば社会人ですね。こつちは



大学三年生で司法試験受験を控えている、そういう詰め襟の学生でしょ。向こうはもう銀行に入ったら社会人ですから。青年会というのがあって、他の銀行と青年会同志の付き合いがある。そうするとまた言い寄ってくるやつがおるわけです。

「交際してほしい。結婚を前提にして付き合ってくれ」

とかね。そういう情報をうちの奥さんは、司法試験の準備勉強をやっている僕に次々と言ってくるわけです。こっちは辛いんですよ。つまり、私の当時の気持ちは、

「待ってくれ。必ず君と結婚するから」

なんて、そんなことは言えた義理ではない。というのは、大学の三年生くらいで、自分が社会人になってからどんなふうに自分自身が変化するかわからないでしょ。全く将来がわからない人間が相手を拘束するなんて、それはできないことです。だから、僕はその時に、つくづく残念に思ったのは、同じ年齢で好きになるというのは、男は辛い。女は早く大人になります、特に就職でもすれば。ところが、こっちは詰め襟の学生で勉強しているでしょ。自分自身が将来どんなふうに変わっていくかわからない。そのわからない人間が将来を約束して「待っていてくれ」なんて、そんなことは言えた義理ではないでしょ。そういうことですごく私は辛かったですね。まあそんなことが、高校・大学時代です。

大学では、もう他の連中は就職とか何とか考えていたらしいけれども、私はひたすら裁判官か、何かそういう、人に頭を下げないで済む職業に就こうと思った。「二重帳簿をつけろ」と言われて、その頃の日本の企業とか社会というのはそんなのは平気なんですよね。だから、そんなのは私は絶対いやだと。ごまを摩ったり、そういった不正に関与しないで貫ける仕事とは何かというと、裁判官ぐらいしかない。それならもうそれで行くと思った。それを私は一応貫いたことになりましたけれども。それが「わが生い立ちの記」なんです。

しかも、経済的には豊かではなかったから、三年生のときには家庭教師を二口ほど持つて、それで土曜・日曜は八尾に帰っては家庭教師をやつて、他方で司法試験の受験勉強をやっている。しかも、育英会から奨学金をもらっています。そのあと全部、18年間かかって——合計9万円でした——それをお返ししましたけれども。そういう、まあいうならば貧乏学生ですわ。親にそんなお世話になれないというので、いわば追い詰められた身分だから、他の連中のようにシャーシャー、パーパー遊んでいられない。司法試験を必ず一発で通らなければいけない。ちょうど私に目をつけてくれた民法の教授が——私を見込んでくれたのかな——私が四年生で、10月位だったかな、これから東京で口述試験を受けるといふ、それに出掛ける前くらいに、

「司法試験に合格したら研究助手に——教育公務員というポスト——それに推薦したい。もしも司法試験に落ちていたら、席を大学に置いて司法試験だけは取っ



ておいたほうがいい。なぜかという、学者の道に進んで、これは向き不向きがあるから、学者としてやはりやっていけないとわかったときに、いわば逃げ道として司法試験を通っていたら、すぐ弁護士の道とかいような道があるから、やはりそういう逃げ道をつくっておいたほうがいい」

と言われた。そのくらいに自分としたら、経済的な面ではギリギリいっぱいの生活をしてきた。ところが幸いなことに、司法試験はベストテンで合格しました。それで、その研究助手に推薦してもらった。

研究助手は国家公務員ですから、ちゃんと給料をもらえます。それで、結婚した。あの頃は二年たって論文出したら、助教授にもらえる制度だったんです、京大の法学部は。何でかという、司法試験を合格して二年たったら、普通は判事補なんです。判事補というのはちゃんと給料をもらえるし、いわば一人前の待遇を受けるわけです、そっちの道では。ところが、研究助手は、助手では経済的に恵まれない。そこで京大の法学部は、片一方が判事補でいわば一人前に認められるなら、京大の法学部のいずれ教授になる人たちは二年たったら助教授で待遇しようということになって、助教授にした。ところが、文部省からクレームが出て、

「二年は早すぎる、三年たたないと助教授にしたらいかん」

と、文部省が文句を言いだした。それで「講師」という身分をつくって、表向きは講師だけれども、もう審査は終わっているから、三年たったら堂々と助教授扱いするということ、私は学校に残ることができた。

残ることができたことの最大のメリットはお金をもらえること。その頃の月給は、9,800円だったかな。銀行にうちの奥さんが勤めていた頃は11,000円位もらっていましたよ、銀行員として。ところが、私の手取りが9,800円位。それでもとにかくお金をもらえる身分になったから、それでまあいわば結婚もすることができたんですね。

そういう、非常に私としては経済的な面では親を頼りにできない。しかも、私のところには妹や弟がいますから、自分は親のやつかいにはならない。むしろ、こっちが親の面倒をいつ見なければならぬかわからないという、そういうふうなやや追い詰められた立場だったんで、他の一般の学生なら、一年だめならまた二年目があるさというようにことで勉強やっているけれど、こっちはもうすべて一発勝負でクリアしていかないとやりきらないという、絶えずそういう追い詰められた状況で私はそこを切り抜けてきた。その頃はまだキリストさまを知らない時代ですし。

●子どもの頃

（市村）ちよつともう一回、子どもの頃の話に戻って、もうちよつと厚みをいただいて



よろしいですか。家族構成は、お父さまとお母さまと、腹違いのお兄さまと、あとは？

（奥田）あとは私よりも二つ歳下に長女、これはのちにクリスチャンになりました。これは充子^{みちこ}といえます。この充子とはよく気が合いました。それから三つ下にせつ子という妹がいた。それから更に五つくらい下かな、卓志^{たかし}という——これは確か昭和15年生まれだと思う。僕が昭和7年生まれでしょ——僕とその卓志との間は8歳年が開いている。それが一番末の弟です。ですから、妹が充子とせつ子という二人いて、弟が卓志というのがいる。僕の一年上に兄貴の至徳^{よしのり}というのがいる。私が次男の昌道^{まさみち}です。（市村）お兄さまとは仲が良かったですか。一つちがいと、全然その腹違いとは知らないで、普通に仲良く育ったわけですかね。

（奥田）そうです、いや、うちの兄貴が気の毒だったのは、これは親父のトンでもない過失だと思うけど。あの頃は学校へ戸籍謄本とか、そういうのを提出することになった。それで、あれは小学校だったと思うけれども、その三年か四年になるときに、戸籍謄本か何かそういう戸籍を学校へ持って来させていたんですね。それを親父は不用意に、

「おい、これを持って行け」

と渡した。兄貴はそれを見たら、腹違いではないかと。物凄いショックだったらしい。しかもそのショックを誰にも言えない。だから、兄貴は気の毒だったなと、今から思う。それも、親父は何とバカなことをやるんだ。そんなのを子どもが見たら、ショックを受けるのはわかりきっているのにと。それを普通ならちゃんと封筒に入れて、

「これは大事なもののだから封筒に入ったまま先生に出せ」

とか言うべきところを、それもせずに、ホイと渡してね、兄貴がそれを見て、

「お母さんが違うんや、みんな腹違いの子や」

と、それはあの時の兄貴のショックを想像しますと、僕は同情しますよ。「何たるバカなことをやるんだ、このクソ親父は」と思いましたよね。だから、兄貴は本当に辛かっただろうなと思います。まあそういう子ども時代でした。

（市村）お母さまは専業主婦になられたわけですね。

（奥田）もちろんそうです。専業主婦です。

（市村）お父さまは結構、何ていうんですか、亭主関白みたいなの？

（奥田）そうなんです。親父は外ではいいんです。外面^{そとづら}のいい男というのは、家ではその鬱憤を家庭内で晴らす。だから、「外で面のいいやつには気をつけろ」と誰かが娘さんたちに対して言い聞かせる、そういう箇所があるんですね。正にうちの親父はそれのお手本みたいなやつ。だから、外の人から見たら、「いい人や、いい人や」と言われる。ところが、家の中へ帰ってから、「何だこのアホッパレが！」と、家の中で暴れまくるわけです。そんなんでしたよ。



（市村）先生は野球好きなので、お父さまとキャッチボールした思い出とか、そういうのがあるかなと私は勝手に想像しましたが。

（奥田）ないない。しかも、私は子どもながらに腹が立ったのは、私は小学校・中学校かな、成績がいいんですね。兄貴は成績はもうひとつだった。そうすると、通知表なんか見て、僕は担任の教師から^{ひいき}贔屓されている、兄貴は教師から憎まれている、だからこういう差があるんだと言われる。僕は兄貴の担任の先生の所へ出掛けて行って、

「親父からこんなことを言われている。先生、正直なところを教えてください」

「決してそんな^{えこ}依怙贔屓はしてません」

と、はつきりと先生は言ってくれた。「はい、ありがとうございました」と。そんなふうになにかにつけて、親父は兄貴をかばう。二人を比べると、僕がすべてトップレベルでいくでしょ。兄貴はもうひとつだというので、僕は教師から^{ひいき}贔屓されている。必要以上にいいように見られている。兄貴は教師からはよく思われていない。だからこんな開きがあると言う。こっちからしたら、悔しいわけです。だから、この悔しさをどうしたら解決できるか。担任の先生に聞きにくいかなと思った。事情を言って、「私は口惜しいんです」と。「決して、依怙^{えこ}贔屓はしてません」と。「はい、先生、ありがとうございました」と。そんなんですよ。

（市村）じゃ、お父さまはやっぱ相性のよかった最初の妻のことと、その一人になってしまった不憫さがあって、お兄さまを可愛がってしまった？

（奥田）そうそう。それはそれで今になつたらわかるけれども、子どもにそんなことを知れと言われてもね。

（市村）お兄さまとは何となくよそよそしくなってしまうんですか。あまり仲良くなかったんですか？

（奥田）いや、そんなことはなかったですよ。本当に兄貴はいい兄貴でしたよ。ただ兄貴は、なんかお座敷のまんなかにどーんと座って動かんという、そういうタイプだった。だから、妹や弟の世話をするのは全部私だった。小学校の勉強のこととか宿題とか何とか、そんなのを全部私が面倒をみました。兄貴はお座敷に座りこんで動かないという、そういうたちでしたね。だから結局、私が一番兄貴らしく弟妹の面倒をみていたのは私だった。それから、お母さんのお手伝いからいろんなことを全部私がやりました。その点ではものすごい、私は母親孝行の息子だったですね。

（市村）ご家族にはクリスチャンは誰もいなかったんですか？ 妹さんが後々クリスチャンになったと仰ったけれども、ほかにクリスチャンの方はいらっしやったんですか？

（奥田）いなかったですね。

（市村）お母さまは英文をやっていると、どうしてもキリスト教を身近に感じていらし

たと思うんですけど、あまりそういうことはなかったんですか？

（奥田）母親は時々、讃美歌を歌っていたかも知らない。でも、母親自身はキリスト教にはなじめなかったようですね。それというのもやはり、母親からしたら、「罪」の問題ですね、「罪の意識」というかな。我々は小池福音で、どん底から罪が贖われて、もう罪無き存在としてキリストは見てくださって、聖霊という方が我々をかばってくださるという、そういうキリスト教でしょ。ところが、母親が育てられたキリスト教というか、関わりをもったキリスト教というのは、必ずしもそういうおらかなものではなかったのではないかなと思う。讃美歌なんかは時々歌っていましたけれどもね。でも、クリスチャンにはなれなかった。しかも、その頃は、家庭の主婦というのは、お仏壇を拝まなければいかんし、そういういわば家庭の主婦でクリスチャンになる人は物凄く苦労があるわけです。家では「仏壇を守れ」と言われる。仏壇にお灯明とうみょうをあげたりお供えをしなかったら、けしからんということになる。ところが、教会では

「仏壇は邪教である。仏壇なんか叩き壊せ」

と言う。だから、日本の女性で家庭に入っている人はすごく辛いですよ、立場上ね。そういうことを思いますね。うちの母親はそういう讃美歌なんかは時々くちずさむことはあっても、クリスチャンにはならなかった。それと、その頃の福音というのは、本当の意味の赦しの福音ではなかった。もうちよつと道徳的だったんではないかな。だから、「自分のような者は救われっこない」くらいに思っていたのかもしれない。

本当の赦しの福音を純粹に説いたのは、小池辰雄先生ですよ。その当時の、私は教会なんかも、外国宣教師の教会とか、日本の日本基督教団の著名な先生の大阪の教会なんかへちよつと出入りもしましたけれども、そんな小池福音みたいな豊かな、無限無量な赦しというかな、そういう意味のものは説いていなかったですね。厳しいというかな、自分を責めてしまうという面が強かったですね。そういう点では、小池福音というのは本当に素晴らしい福音であるということはいえると思いますね。

まあお袋にしてみましたら、審かれるという意識がどうしても強くて、はじめなかったのだろうと思います。でも、お袋は時々、讃美歌を歌ったりしているのは、なにか子どもの頃に入ってきていたように思いますけれどもね。

●草野球と体操

（市村）子どもの頃の友人とか親友とか、何をして遊んでいたとか、何か強烈に残っている思い出がありますか？

（奥田）小学校の頃は、そんなに友だちと意識するようなのはいなかったですね。それから中学・高校くらいは、そうあの頃は中学がそのまま高校に切り替わるわけですから、男のほうからすると六年間、同じ学年ならクラスは違っても、六年間ずっと過ご



しますから、深い関係ができる友だちというのは結構あるわけです。その中で一人、名前からいうと、福井安男君というのと仲良くなった。高校の三年間のことをよく憶えています。彼は目立たない存在だけでも、ピッチャーをやってくれていて、クラス対抗とか何かの時には、いつも私がキャッチャーをやって、福井君がピッチャーをやった。プロ野球でいうと、斎藤雅樹という素晴らしい20勝投手が巨人にいましたよ、そういう感じのピッチャーです。その頃は、考えてみたら、キャッチャーマスクなしで受けているんですよ。普通なら、あれでファウルチップして顔面に当たったら大怪我するのに、そんなマスクなんてない時代でしたから。それで僕がキャッチャーやって、福井君がピッチャーやって、だいたいボールが速いから、まともに前へ飛ばなかったですね。そういう福井君と僕がバッテリーを組んでいた。

（市村）野球部があつたんですね。

（奥田）野球部なんて入らなかったです。つまり、あの時に野球部になんか入ったら勉強ができない。ああいう時にクラブに入るといのは、そっちのほうが主になってしまつて、つまり甲子園に出るために。だから、僕はそういう意味では、野球部はもちろんだけれども、体操も好きだけれども、クラブへは入らない。すべてそれをクラブ以外の所で自分一人でやるという文武両道ですけども、それを貫きました。

体操部も、三年生になつてから、いわば体操部員のような生活をしました。もう上がいないから。上に文句言うやつがないでしょ。それと、体操部というのは団体競技ですから、人数が五人とか六人そろわないと、他流試合ができない。ちょうど、9月23日に大阪の中津という所で府民体育祭というのがあつて、そこへ我々八尾高校で参加して、体操競技で——僕も六人の中の一人として入つて——優勝しましたよ。そんなこともあつた。団体競技というのは、メンバーで加わつたら、最低でも6点や5点はくれるんです。いなかつたら0点です。そしたら、へたくそでも加わつておれば、6点か5点はかせげるから、それで僕もちゃんと加わりまして、そして優勝しましたから。それが私にとっては一つの誇りですよ、文武両道の。

（市村）先生はその時、競技は何を？

（奥田）その頃の体操は、床運動——これはマット運動と言つてました——床ではなく、マットの上を逆立ちしたり回転したりとかいろいろなことをやる。そのマット運動と跳馬（跳び箱）と鉄棒の三種目でした。そのあとで平行棒とか、それからもつとあとでリングとか、いろんなのが入ってくるんですけれども、僕らの頃はまだ初期だから、マット運動、跳馬、鉄棒の三種目でしたね。

（市村）跳馬なんかできたんですか、先生は？

（奥田）跳ぶだけですよ、そんな跳びながら回転とか、そんなことは全然やらない。ああいうひねりとか何とかはあとになって出てきた。その頃はそんなのは全然なかった。



（市村）野球は、草野球みたいなものではなくて、同好会みたいなものでしたか？

（奥田）いや、草野球。特に高校まではまともに野球はやってなかった。大学へ行つてから、クラス対抗とか何とか、そういうことではやりましたけれども、高校までは野球は自分で好きでね、キャッチボールを家の周りでやつたりはしましたけれども、正式には全然チームはつくつてなかった。その頃はクラス対抗の野球大会といふかな、公認のものではないけれども、クラス対抗でよく高校のころにやつたと思いますけれども。そういうクラス対抗のときの、福井君が投げる時は僕がキャッチャーをやつて、快速球だからまともにボールに当たらなかった。それを僕がやっていたというのをよく憶えていますね。でも、マスクもなしでよくやつていたと思いますよ、今からいえば。それは玉がかすらないからね、快速球で。そういうとてもいい思い出です。

●鉄棒とランニング

（市村）将来クリスチャンになるわけですけども、子どもの頃に何か強烈に不条理を感じたとか、傷ついたとか、何か今おもえばみたいな出来事とかはありましたか？

（奥田）いや、子どもの頃はそんなのはなかったですね。ただね、私は子どもの頃は非常に病弱だったということはよく憶えています。特に小学三年生の三学期は全部休みました。寝たつきりで。

（市村）何のご病気だったんですか？

（奥田）風邪引きですよ。しかも、その頃の風邪というのは、そんなに治療薬が多分なかった。それで親父は何をしたかというと、妙見山というのが兵庫県の近くにあるんですが、その大阪のご祈祷師——ご婦人でしたけれども——それと呼ばびよせてご祈祷をお願いする。それが来てやるわけです。

（市村）そういう時代なんですね。

（奥田）そう。そのご祈祷師は神さまが乗り移っているぞという感じで、ものの言い方もちよつと違うようになる。それで、「ウワ〜ッ……」とやる。そんなのをわざわざ呼んでくるわけです。そんなご祈祷師に祈ってもらつて、風邪が治るもんですか。そんな時代なんです。だから、三学期を全部休んだ。そういう意味では、体は弱かったと思います。で、親父が、

「お前は体が弱い。それにはやつぱり体を鍛えないといかん。鉄棒がいい」

と言つてくれた。それで小学校の低い鉄棒で逆上がりとか、蹴上がりができた時には物凄くうれしかった。低い鉄棒で蹴上がりができたので、今度は高い鉄棒で蹴上がりしたとか、大振りとか、だんだん自分なりにやるようになった。それであの頃に鉄棒が得意になつてきた。特に高校の頃は、休憩時間には砂場に行つて鉄棒にぶら下がつて、10分間の休憩でも遊んだり、お昼休みにも鉄棒で遊んだりした。



そういう頃に、あげくの果ては自分の庭に自分で鉄棒を建てたですよ。それも全部、自分一人でやった。昔、戦時中は家に防空壕を掘って造らないといけなかった。その防空壕をつぶしてしまつて、その跡地に穴を掘って、そして鉄棒もちゃんと土台を造つて、コールタールを塗つて、それを埋めるわけです。

（市村） 高校生のときに？

（奥田） そうそう。ちょうど私の高校時代の友人に鉄工所をやっているお父さんがいて、その方がステンレスの鉄棒をプレゼントしてくれた。それで柱と土台は全部自分で造りあげて、それをコールタールを塗つて本格的に埋めて、庭に鉄棒をちゃんと設置して、それで自分一人で逆車輪までやりました。今から思えば、あんなことをやって手が離れたら大怪我をしますけれども。ぶら下がって、ひよいと上るくらいにね、ごく筋肉マンでした。

上半身は鉄棒で鍛え上げて、下半身はランニングです。その頃は、走っているやつなんて誰もおらん。だから、夜明け方に、みんな人が寝しずまっている時に起きてランニングする。場所はどこかという、私の所からすぐ行ったら産業道路というのがあつて、これがずっと八尾のほうから——近鉄線という奈良線ですね、私の所は大阪線になるけれども——そういう産業道路が、コンクリートの非常に幅の広い道路が貫通している。その道路を朝のうちに毎朝、人が寝しずまっている時に起きてそこを1キロほど行ったら川が流れていて——そこまでがだいたい1キロちよつとだと思つて——それを往復することをやった。いやあの思い出は素晴らしいですよ、まだ夜が明け始める頃ですから。

何でそれをやり出したかという、高一のときに体育祭があつて、そこでみないろんな種目でクラス対抗をやるけれども、その時、私は、フォークダンスなんかがあつたものだから、それが嫌なものだから法事があるとウソついて休んだ。それで今度は高二のときの運動会の時に、それはクラス対抗ですからみなに割り当てるわけですが、僕には割り当ては何もないんです。その前は休んでいるから。それで物凄く口惜しかつた。よし、三年生の時にリベンジするからというので、それから僕は一人で走りだす。それでもう三年生になったら、みな受験勉強で大変な時ですから、誰も運動のほうはやらないわけです。僕はもう三年生の時は余裕綽々ですよ、だいたいもう勉強なんか出来上がっている。で、三年生の時にいろんな種目に参加する、そのための準備がちゃんと出来上がっているという、そういう生活です。

記憶に残っているのは、産業道路という道路を朝方——車も何も通らない——そういう所を片道1キロちよつと程度ですけれども、そこを1キロほど行ったらちよつと川が流れていて、そこまで走ると、向こうに生駒山、こっちは信貴山という山並がある。そこから朝日が射してくる。周りは田んぼのあとの刈り取った麦畑。霜柱が立つ



ている。そこを踏むと、ザクザクツと気持ちがいい。雲雀が鳴いている。そして陽が射してくるといふ、これは物凄くいい景色ですよ。そういう所を一人で走って往復している。それをやっているから、三年生の時の体育祭はいろんな種目に参加した。他の連中は勉強があるから辞退するのを、僕が引き受ける、「それは俺がやるよ」と。だから、三年生の時は楽しかったですね。つまり、一年間体育祭で口惜しい思いをした。それをリベンジするためにそれだけのことをやった。

（市村）一年の時は休んでしまつて、二年の時は見ていただけだったんですか？

（奥田）そうです、参加する種目はなかったもの。はじき出されているもの。強くなつて、三年生の時にはやつたぜと。

（市村）奥さまと最後の年ですし、奥さまに格好いいところを見せなくてはね。

（奥田）その頃は、本当に私はもう口惜しくて、「よし、目にも物を見せてくれる」というので。もちろん勉強もやりましたよ。勉強もやつたけど、そこで一年間自分で鍛えあげたというのは非常によかつたですね。

（市村）最初に、小学校の時に体が弱くて、お父さまが、「鉄棒で鍛えろ」と言つて、それで始めたのですか？

（奥田）そうそう。「鉄棒しろよ」と言われた。その鉄棒といつたつて、小学校は低い鉄棒です。中学へ行つてから高い鉄棒になりますけれども、砂場に行けば高い鉄棒がありますから、そこで始めた。

（市村）始めはお父さまが付き合つてくれたんですか？

（奥田）いや、全然そんなことはない。ただ口だけで。それも一言か二言くらいかな、「鉄棒やつたら体が鍛えられるよ」と。そんなことをやっているのは私だけでしたからね。ランニングは、走っているやつはいないから、恥ずかしいから夜明けに走る。鉄棒もやっているやつはいないから、始めは低い鉄棒です。高校くらいになると高い鉄棒が砂場にありますから。そこで休憩時間になつたらそこへ行つてはぶら下がって自分やる。

●窪田君という大きな存在

それから後にオリンピック選手になつた窪田君という存在が私にとって物凄く大きかつたですね。その窪田君が非常に私のことを可愛がつてくれて、お宅へも行つて泊めてもらつたし、またそこのお母さんがとてもいい人で、私のいろんな悩みを聞いてくれたりした。だから、私のいわば恩人の一人です。窪田君はオリンピック選手で活躍しました。それで窪田が僕に言うには、

「俺は体操のほうで日本一になる。君は勉強で日本一になれ」と言われて、そんな間柄でした。



（市村）窪田君とはいつ頃まで連絡がとれたんですか？

（奥田）いや、今でも。まだ彼も健在ですし、天理大学の体育のほうの先生をやつてますから。

（市村）そうですか。では、先生のことを今も、日本一になったというのはよく御存知なわけですね。

（奥田）そうですね。いや、日本一かどうかはしりませんが、一応その道では認められるようなことになったということは。でも、窪田君には本当に私はお世話になりました。特にお母さまがとてもいい人でね、その頃、珍しかったと思うけれども、恋愛結婚をされている。そのお父さんが早くに、窪田君がまだ三歳くらいの頃に亡くなって、あとお母さんが女手ひとつで自分が学校の先生をやりながら窪田を育てたという、そういう肝つ玉母さんだったんですね。そのお母さんが物凄く私のことを大事にしてくれて、まあ恋の悩みにしても何にしても全部お母さんに打ち明けていた。そういうことでうんとお世話になった、ありがたい存在でしたね。

●松浪先生との出会い

それも一つですけども、私はいろんな節目節目で素晴らしい人に出会っている。たとえば、私が京大を選んだのは、その頃、八尾高校といういわば郡部の田舎の学校にしたらやっぱり、京大、東大と並べたときに東大のほうが圧倒的に人気がある。それでみんな東大、東大と言っている。僕はやっぱりそこまで言われたら東大へ行かんならんかと。親父は「行きたかったら行ったらいいよ」なんて言う。お袋にしたら、今でも経済的にピーピーしているのにそれでも東京なんかへ行ったら、住居から何から大変なのをわかつているでしょ。ところが、親父は

「いや、向こうへ行ったら、向こうで俺の友人がいろいろ世話をしてくれる」とか何とか、気前のいいことばかり言うでしょ。それで僕は悩んでいた。

その悩みを解決してくれたのが、松浪先生まつなみという、これがまた格好いい先生でね、あの頃は東大出の人なんかは就職がなかった時代でね、戦後ですけど、そうすると八尾なんかへ流れ込んできて、腰掛けで教師になる。それであの頃、私は良かったと思うのは、普通、教師というのは師範学校出なんです。高等師範学校を出たら中学の先生になる。そうでなかったら、小学校の先生とか。師範学校出の先生というのはパターン化されている。ところが、そういう師範学校を知らない先生は物凄く個性がある教育をしてくれる。私が影響を受けたその松浪先生というのは東大を出て、八尾中学へいわば腰掛け的に来てくれて、教えてくれる。その英語の教え方もそこの師範学校出の先生とは全くちがう。個性的な教え方をしてくれて、その先生に、ある種の憧れを持つてました。ところが、ほんの一年くらいでまた東京へ行ってしまった。なぜか



というと、ブランデンという英国の詩人が来た。自分はそのブランデン教授の所で勉強したいからというので、一年ほど八尾で教えてくれたあと、東京へ行ってしまった。ところが、その松浪先生に、僕が高校三年生で京大へ行くか東大へ行くかで悩んでいる時に、ぼったり小阪という近鉄奈良線のプラットホームで出会う。あれは不思議でね、なぜあんな所で、しかも松浪先生に出会ったというのは、今だにわからないけれども。当時の僕は京大へ行こうか、東大へ行こうか、迷っていた。というのは、我々からしたらやはり東大が一枚上なんです。親父は

「行きたかったら行ったらいい。東京に自分の友人がいっぱいおるし、そういう友人が世話くらいしてくれる」

と気前のいいことばかり言うわけです。お袋は、

「東京なんかへ行ったら、もう生活が大変だ」

と。私はずっと悩んでいた。松浪先生にぼったり、小阪という駅で出会った。それで率直に、

「先生、僕は東大へ行こうか、京大へ行こうか、実は悩んでいるんです」

と言ったら、

「いや、君は京大が向いているよ。東大は君の行く所ではないよ」

と言った。

「はい、わかりました。ありがとうございます」

と言って、一発で京大と決めた。だから、なんであんな所で松浪先生に会ったのか。しかも、その松浪先生はブランデン教授の所へ行くといって出掛けてしまった。そのあと、神戸大学の文学部の教授になっています。つまり、それだけ優秀な先生が腰掛け的に来てくれていた。師範学校出のパターン化された教育でない、ユニークな教育をやってくれていた。英語もそうです。

英語で何が良かったかという、英作文を上手になるためには日記を書くことです。日記には、「^{アイ}I」とかの主語が要らん。だから、僕は恋の悩みを全部、日記に書いた。タイトルは「^{アゴニー}agony」「悩み」という。松浪先生は、日記は「^{アイ}I」という主語は省く、そして淡々と書いていく。英作文を上達しようと思ったら、それが一番だと言われた。僕はその通りやった。そうすると不思議ですね、どんな文章もスラスラと書けるんですよ、そういう訓練をやっていると。というのは、それをやる時にわからなければ辞書を調べたりしますよね。だから、その「わが悩み」を文章に綴るために物凄く勉強するわけですよ。

それが役立ったお話は、うちの奥さんとか女子のグループがアメリカの女優さんたちと文通するわけです。ファンなんです。その作文を僕がつくる。そうすると、その女優さんに見てみたら、嬉しいわけですね、日本の女子学生からファンレターがく



るようになって。それでまた返事がくるでしょ。それをこっちがやっているわけです。

（市村）翻訳してあげたり、つくってあげたりとか？

（奥田）そう。しかもそれは僕にとつては大変な仕事ではないんです。言われたらパツと書いた。そのくらいやつぱり力がついてました。松浪先生のおかげです。そういう出会いがあった。松浪先生はその後、神戸大学の英文学の正教授になられたくらい素晴らしい先生です。そういう方との出会いというのが、私を「東大か京大か」の悩みから救い出して、「あなたは京大だ」と言われて、京大へ行った。

● 於保不二雄教授の後継者に

京大へ行ったら、京大でまた僕を世話してくれた民法の先生が本当にいい先生でね、親父代りになってくれた。それで京大の法学部に残ることになった。そこで助教授、教授というふうにならずと行つたでしょ。そして、出てから、自分のいろんな人生の悩みのときに、今度は小池辰雄先生に出会っているわけですね。

（市村）大学のその民法の先生のお名前は？

（奥田）おほふじお 於保不二雄という。あの先生は佐賀県の西の端くらいの所がご出身らしい。あの辺では「於保」という名前は非常に多かったと仰っていました。これは本当に素晴らしい先生でしたね。その先生に私は見込まれて、その先生の跡継ぎに指名されました。あの頃は、旧制の大学は講座制ということになっていて、講座担当者は自分の後継者を選ぶということが、京大だけだったかもしれませんが——とにかく片一方で大学院という制度があつて、大学院で勉強する方は自分の大学院で論文を書いて、その論文で就職口を探すけれども——講座担当者は講座の後継者を自分で選ぶ権限があつたんです。それで僕はその於保先生に見込まれて、先生は自分の後継者にとわられたんでしょうね。それでまあいわば一本釣ですね、鍛えていただいた。本当にその於保先生にはずいぶんお世話になりました。

ですから、大事なこと、大事なこと、いい先生に僕は出会っているわけです。小池辰雄先生もそのお一人になりますけれども。於保先生には本当にそういう面では、親父代りにお世話になりました。そういうことが人間関係でありますね。

僕にとつて大事なことは、学者の道はそうやって於保先生という方に導かれて、そこまではよかったけれども、今度は内面の悩みですね。人生は何なんだ？ 学問は何のためにするんだ？ 民法学をやることは自分にとつて何の意味があるのか？とか。しかもそのときはマルクス主義の盛んな時代ですから、マルクスは、自分のそういう連中からしたら人民のための学問とか言う、

「法律学なんて人民から搾取するための手段に過ぎない。そういう人民を支配し人民を搾取する民法なんていうのを勉強して何の意味があるのだ。人民の敵ではな



いか」

と。そういう思想が強い時代なんです。そんな中で民法をやるというのは、よほど強い信念がなかったらできない。自分にはそういうものが何もない。だから、そういう悩みが一方ではある。

それから、人生は何のために生きているのか？ お前はだいたい何者なのか？ という根本的な悩みがあるでしょ。そんなのはそれまではわきに置いてきた。まず司法試験を通らねばいかん。まずこれをせんなんという、そういう目先のことをクリアするために退けていた問題が、いざ本気で学問をやつていこうとしたら、全部かかってくるわけですね。

しかもその頃は——大学院では授業を受けたりするんですよ、大学院の制度があるから——助手というの是一本釣ですから、お師匠があつて弟子がいて、そのお師匠の教えに対して他の教授方は口出しをはさまないんです、遠慮して。そういう非常に閉鎖的な時代です。だから、お師匠さんとの間がうまくいく人はいいけれども、そうでなかったら行き詰まりますよね。僕のお師匠さんは本当に純粋な方で、学問的には素晴らしい方ですけども。

「先生、何のために学問するんですか？ 民法は誰のため？ 人民のためですか？」

「そんなことが気になるようなら、さつさと辞めなさい。そういうことを解決せん

と、できない人間は学問には向いてない」

と。その先生は、「学問のための学問だ」と言われた。当時は、全然受け入れられないような考えです。だから僕は、もうこのおっさんには相談しないと、自分で腹を決めましたね、そこまで言われたら。

（市村）なぜ、民法を選ばれたんですか？

（奥田）それはその先生が素晴らしいから。やっぱりその頃は、自分の先生に打ち込むわけですよ、自分を放り込むわけです。この先生のもとで修行したいという気持ちが強いです。まあ「徒弟制度」と言われればそれまでですけども。学者を育てる組織は大学院というのがあるけれども、そんな大学院でゆつくりやつているゆとりもないわけですね。大学院は奨学金をもらったりはできるでしょうけれども、経済的に何もかも全部自分でやつていかんならん。ところが、助手だったら国家公務員ですから、給料を貰えますしね。しかもその頃はそういう一本釣で、「もうお前は俺の跡継ぎだ」と言われたら、いわば順調にいけばもう教授職は約束されます。そういうところに身をおいて、そういう意味では備わったけれども、

「お前自身は何者なのか。お前はこんなことをやっていて、お前の人生にとって民法は何の意味があるのか？」

と、そういう問いかけが次々くると、私自身というのが何もわかってない、私自身も



わからない人間が民法をやってどうなるのかと。それを先生に訊いたら、「そんなことが気になるなら、さっさと辞めなさい。学問のための学問だ」と、とりつくしまもない。そういうふうには本当に僕は悩みました。その時の私は、「このおっさんには一切相談しない。こつちが本気で訊いたのに、さっさと辞めろとは何事か」と腹がたった。腹が立つのはいいけれども、それならお前はどないするのか。何も答えは出てこない。そのときにいろんな本を読みました、全然答えが出てこない。

●オズボーンの大集会

そんなことがあった時に、市川喜一という人をおしてキリストのほうへ導かれたわけですね。

（市村）市川さんは年上でしたっけ？

（奥田）ええ、二年年上です。でも、彼は旧制高校に入っていた。そして京大の法学部の新制を受験してます。トップ入学ですよ、やっぱり旧制に入っているから実力がある。今の京都工業繊維大学という、その前身である工業繊維専門学校という所へ入っていて、実力もあったんでしょう。それで京大の法学部をトップ入学でした。京大の中では同学年でしたが、彼は自分に実力があるから、選ぶ単位が語学でも何でもみな我々ペーパーがやるものではないルートで来ますので、ほぼ卒業するまでは繋がりがなかった。繋がりができたのは、ローマ法か何かの研究会に——彼は一応、籍を大学院に置いていたから——それでそういう勉強会の後の懇親会の時に、他の人はキリストのことをからかうわけですね、「聖書に書いてあることはみなでたらめだ」なんて。

ちょうど僕は——いつか書いたと思いますが——オズボーン (T.L. Osborn) というアメリカから宣教師がやって来て大集会をやった時に、次から次へ病気の人が癒されていく。それを僕は本当に目の当たりにして、同輩に

「聖書に書いてあることは全部本当だということがよくわかりました」

と言ったら、

「あれは全部サクラだよ。そういうやつを呼んできて、いかにも治ったような振りをしてやる」

「いや、あれはサクラではない」

と、やりあったことがある。

そのオズボーンの通訳をやっていたのが市川君だった。もう一人、私市君ささいちというのもしましたけれども。その市川、私市というのは物凄く語学ができる人で、私市君はその後、英文学の先生になって、甲南女子大学の教授に、最後は名誉教授になって学者の道へ行きました。市川君はそうではなくて、伝道者の道を選んでいろいろ苦労し



ましたけれども。そういう市川君、私市君という語学のできる方が通訳をやっていた。市川君が僕にそのオズボーンの伝道集会にいつペン来てみませんかと呼んでくれた。そしたら、その集会が本当に素晴らしかった。そんなことがありました。本当にそのオズボーンの集会は癒しの伝道なんですね。

「新約聖書に書いてあることは全部本当だ。キリストは今も昔も変りたまわらない。今も癒しの御業をなさってください。病気の方は、どうぞ壇上に上がってきてください」

と。病気であつても壇上まで上れるだけの元気がある方ですけれども、上がってきたら、

「どこが悪いか言ってください。私はあなたのために手を置いて祈りますから」

と。その祈りが本当に涙を流して祈るんですよ。この33歳ほどの若い——しかも戦後10年しか経ってないですよ、昭和30年頃というのは。昭和20年に日本は戦争に負けてますから——わずか戦後10年位しか経ってない所へ、戦勝国の若い伝道者がやって来て、名も知らない、どこから来ている馬の骨とも何ともわからない、そういう病人のために涙を流して祈っている。それで、

「はいっ、癒されました!」

と言う。そしたら、それまで松葉杖をついてきた人が松葉杖を捨てて、

「ありがとうございます!」

と喜んで帰るんです。そういうのを見たら物凄く感動して、それを研究会の懇親会で言ったら、

「あれは全部サクラだ。芝居をやっている。あなたは単純やから騙されやすい」

と、そんなふうに私は笑われたけれども。でも、そのオズボンの集会で、新約聖書に書いてあることは全部本当だということが身に沁みてわかった。

「キリストが手を按おかれたら癒される」

とかあつたでしょ。そういうことが全部本当だと。現に今、33歳のアメリカから来た若い伝道者が涙を流して祈っていたら、そのことが起こっているではないかと。

●七夕の夜の市川喜一君

(市村) 先生は聖書をもう読んでいたんですね、それまでに。

(奥田) 一応、僕は24歳の時にキリストに導かれて、一年経ったか経たないかくらゐに、二年目くらいの夏ですね。その夏にそういう伝道集会があつた。市川君がローマ法の研究会と一緒にやっていた。その研究会ではギリシャ語で聖書を読む会なんかもやっておられた。僕はギリシャ語なんかはわからないけれども、そういう研究会の懇親会をやるといので、それで懇親会に参加して、その懇親会の終わったあとで、京大の



構内をぶらぶら散歩しながら、私が彼に自分のいろんな人生の悩みなんかを打ち明けたんです。その時に市川君は私のそういういろんな悩みを真剣に聞いてくれて、そして祈ってくれたんですね。それが7月7日の七夕の夜だった。

翌日の7月8日に市川君のやっている小さな集会へ行きました。その集会は、宣教師が夏休みで帰っているあと、いわば代役を任されて市川君が代りをつとめていた。そういう集いに参加したというのが、「集会」と称するものに参加する初めでした。

その七夕の夜に市川君とずっと三時間ばかり京大構内をぶらつきながらお話ししたというのが、本当に僕にとっては大事だった。私に語りかけてくれる市川君が本当に平安そのものなんです。僕はもう助手という身分をいただいて、将来のポストも約束されている、いわばこの世的には非常に恵まれた身分にある。彼は大学院生で——当時、立命館へ行くことが決まっていたみたいでしたけれども、あとから聞くと。そんなことは私は知りませんから——片一方は大学院に籍を置いて将来のことも約束されているわけではない人間が、キリストのことを話す時は輝いて話すわけです。他方、私みたいに将来のことを約束されている人間が、悶々と苦しんでいる。この開きは何なんだろうかと。この君をここまで輝かせている、その背後にいらっしゃる方は素晴らしい方にちがいないと。それがキリストだったわけです。

それで、市川君が自分が宣教師から任されて、

「宣教師の留守中を託されている小さな集まりがあるからそこへ来ませんか」

と言ってくれたから、翌朝の7月8日にすぐそこへ行つたわけです。四畳半の小さな暗い、裸電球が一つあるような所に四、五人集まっていましたかね。そこで市川君がしゃべって、また熱弁をふるってやっている。

「ああやつぱり、キリストというお方は凄いお方だな」

と、そう思つて非常に感激したわけです。そういうオズボーンの集会というのと、市川君がそうやって純粹そのものでやっていた、そういうのが私の原点みたいなものです。

（市村）市川さんの集会に出たあとにオズボーンの集会に行つたんですね？

（奥田）でも、ほんのわずかな期間ですよ。その市川君の集まりに行くようになったその年にオズボーンが来てますから。だから、ほんのわずかな期間ですけども。

●ヴィントシャイトのドイツ民法典

それと、非常にラッキーだったのは、その年の9月から年の暮れまで私のお師匠さんの於保不二雄先生が外国出張をなさる。外国出張といいましても、その頃は文部省のほうから順番が回ってくるんですよ。定年退職する前に一遍、外国へ行つてきなさい。自分の好きなことをやっていいからと。いわば今までの慰労的なものです。



それで於保先生は9月初めから年末までの4か月間、なんと75日は船旅です。あの頃の船旅というのは豪華船ですから、いろんな遊びがある。陸上の生活は短い。というのは、自分は言葉もしゃべれないし、勉強もする気がないしね、大学なんてどこへも行つてらつしやない。わずかアメリカで一人、北海道大学から来ておられた先生がいて、その方とはおしゃべりなさったらしい。いろいろお世話になられた。それ以外は何をしていたか。公園で鳩に豆を上げていた。そういう徹底的に外遊、遊びの生活をなさった。それで4か月間経つて帰つてこられて、

「奥田君、どうや、研究テーマは決まつたか、論文のテーマは決まつたか？」

と。こっちはその間は、市川喜一君の指導のもとにせつせつと教会通いをやつていて何もしてへんわけ。そんなことだったですけれども。

でも、その年はそういう意味で、僕にとつてはいわばキリストの伝道集会で——しかもオズボーンが癒しの伝道をやっているから、マタイ・マルコ・ルカ・ヨハネの福音書なんかに出てくるような癒しの御業は現在も生きている。昔も今も変わらないと——キリストは今も生きておられるということが、もう体にしみこんだ。それがありがたかった。

それから、勉強のほうは何もしてなかつたけれども、先生は、

「何かテーマは決まつたか？」

「いえ、いろいろ僕は当たつたけれども、まだこれというのが決めかねて困つているんです」

そうしたら、先生は、

「私はもう年取つて今からは新しい勉強はできない。でも、もしも今、君のような若い立場でこれからやつていいという身分だったら、やりたいテーマはこれとこれとこれ」

と、四つほど揚げられたんですよ。みなでつかいテーマでしたよ。

「では、私はその中の一つをいただきますから」

と。それがドイツの民法学の流れを作った、立法作業にも従事したヴィントシャイト（ベルンハルト・ヴィントシャイト Bernhard Windscheid 1817～1892）という「ドイツ民法典の父」といわれる大学者で、カトリックの信徒だと聞いてますけれども。その方がドイツ民法学、民法典を作りあげた偉大な学者だった。そのヴィントシャイトという方の法学を受け継ごうと、そういうふうに分で決めた。それで彼が若いときにお書きになった教授資格論文があつて、それが「アクチオ」——「訴権」、訴えの権利という意味なんですけれども——「ローマ古典期におけるアクチオについて」とかいふ教授資格論文があつて、それを徹底的に勉強した。まあラテン語のわからんところは飛ばして。それが私の研究のスタートになるんです。このヴィントシャイトという



方は「ドイツ民法典の父」といわれるくらいのドイツ法学の中では非常に尊敬されている大学者で、しかもカトリックの信者で非常に信仰の篤い方なんです。私はその方の「アクチオについて」という論文を徹底的に研究して、自分の論文に取り入れていったという繋がりができた。

（市村）ドイツ語は前からやってましたんですか？

（奥田）ドイツ語は、私は大学のときは二カ国語をやらんからね。英語のほうは誰でもやります。あとはドイツ語かフランス語をやる。僕はドイツ語のクラスを選んだ。教養部というはだいたい、語学が中心なんです、昔から。旧制高等学校なんていうのは語学が大半といってもいいくらい。つまり、あの昔の旧制高校なんていうのは輸入時代ですから、文化を輸入するために語学が必要だった。そういう時代です。それが我々になっても、やはり語学は二カ国が必須です。僕はドイツ語を必修科目に選んだということで、ドイツ語が好きだった。

（市村）このヴィントシャイトさんの論文を勉強するなかで、その方がカトリックだったという、その臭いというのは？

（奥田）全然なかった。その当時のドイツ人というのは、プロテスタントかカトリックかどっちかで、無神論者はいないんです。彼はカトリックの非常に敬虔な信者だと伺っています。そういうカトリックの影響なんてのは全然、学問の中には入ってきていなかった。純粹にそういう法律学をなさっていた方です。人格的にもやはりこのヴィントシャイトという方は素晴らしい方だったのではないかなと思います。彼自身もそういう生活や何かも紹介している論文なんかもありまして、彼の「法と学問」というようなことを背景にしながら、私は最初の助手論文をしあげるといって、それが私のやはり研究の一つの柱になっています、その後も。私の学位論文になったのも——「アクチオ」というのは翻訳すれば「請求権」ということになる——「請求権概念の生成と展開」というタイトルの論文集で学位をとったんです、法学博士というのを。ヴィントシャイトという人はドイツ民法典の父といわれるくらいに、ドイツにとつては大事な方だった。そういう方に私は初め飛びついたのはやはり良かったと思います。

●フンボルト財団留学生としてドイツへ

そんなことで非常にドイツ法との繋がりが強くなったから、留学もドイツへ——当時はアメリカ、アメリカで、フルブライト留学生というのでみなアメリカへ行く——その頃は文部省から行くなんていうのはお年寄りであって、若い人が行くのは向こうの資金をもらって行くんですよ。アメリカはフルブライト、ドイツならフンボルト。ドイツはフンボルト財団からちゃんと奨学金をもらって、それでドイツへ留学しました。ありがたいことに、家族手当まで出すというふうに制度が変わったので家族も呼



んだ。その頃、家族を呼ぼうと思ったら、誰かが向こうで会社に勤めているとか、そういうことで資金を——日本の外貨を持ち出さないと向こうで生活できるという保証がなかったらだめで——外貨を持ち出すことはできない。ところが、ドイツで家族手当を出しますよと言ってくれるから、堂々と家族を呼んだ。私はラッキーでしたけれども。フンボルト財団は若い研究者の卵に惜しみなくお金をくれた。そういうことで本当にありがたい制度に私はのっかって、それで家族も呼び寄せて、向こうで二年半ほど生活できた。そういうことができました。

ついでながら、ちよつと余談ですけども、向こうは大統領と首相というのが全然別なんです。大統領はある種のシンボルなんです。日本は天皇というシンボルがあるけれども、向こうはないですから、大統領が国の一つのシンボリック的存在です。政治的なリーダーは首相なんです。アデナウワーとか、シュミット首相とか、いろいろ名前の残る方が、最近は女性の凄いい首相（メルケル）がいましたよね。

そのフンボルト財団の年次大会がボンの近くであつた時に、私が忘れられないのは、そのフンボルト財団のプレジデントはハイゼンベルクというノーベル賞の受賞者なんです。それから、大統領はリュプケという非常に上品なお方です。それから、フンボルト財団の事務総長と。その事務総長は、我々留学生をリュプケさんに一人ひとり紹介してくれる。そういうイベントがあつて、その時にリュプケさんが演説した。その演説で忘れられないのは、

「ドイツは先の戦争のときには武力でいろんなことをやって、大変、諸外国に迷惑をかけた。もうドイツは武力を放棄した。そのあと何を選んだか。学問的なお友だちをたくさん作ることに。だから、皆さんみたいにそれぞれの国のリーダーになるような方をドイツに招いて、ここで勉強してもらう。それで皆さんが自分の国へ帰ったときに、ドイツのお友だちでいてくれ」

と言う。ああなるほどなあ、向こうの文化政策というのはそんなふうにして——かつては武力で迷惑かけた——だから、今は文化政策として、若い学者を呼んで奨学金を与えて、いわばいい思い出をつくって、そして本国へ帰ったら、「ああ、ドイツのためなら一肌ぬぐよ」という、そういう連中がそれぞれの国の中枢部のいろんな所にいる。それが強みだという。ああなるほど、そういう考え方があるのかと。なかなか日本はそこまで考えていないなと思って、非常に僕は強い印象を受けました。

しかもそこでは、プレジデントがハイゼンベルクというノーベル賞受賞者の著名な方で、大統領はリュプケさんという非常に上品なお方で、そういう方が我々ペイペイを招いて、そういった大会を開いて、一人ひとりと握手してくれる。それでフンボルトの事務局長が一人ひとりを紹介してくれる。

「これは日本からきた奥田という若い学者で、将来有望で……」



とか、一人ひとりを紹介してくれると、リュプケさんが握手して

「まあがんばれよな」

というわけです。そういうことをボンの近くで、なにかいい環境の所でしたね、お庭みたいな所でやってくれて、留学生一人ひとりがそうやって祝福されてという、そういうのが今でも焼きついてますわ、それは「この恩義には報いなくてはいかん」と。それだから、僕は日本に帰ったら今度は、ドイツから民法や民事法の学者が来て、講演会とかゼミナールとかをやるわけですね。そうすると必ず通訳がいるわけです。僕が全部、通訳をやる。ドイツから学者が来ると、通訳をかって出る。学者は東京でいろんなそういう催し物をやりますと、今度は京都へ遊びにくるわけです。そうすると、僕がお迎えして接待する。あちこちのお寺へ連れて行ったりいろいろやるという接待係をやりました。それも嫌でやってない。楽しみでやる。いろんな学者と仲良くなれるし。そんなこともやった。そういうことでドイツとの関係が非常に深くなりました。

そういうことがあつて知らんけれども、ドイツから勲章をもらった。その勲章も最高の勲章をくれましたから（大功労十字章、2006年授与）。非常にドイツとの関係はいまだに深くなりましたね。その勲章をくれることについても——これも余計な話かもしれませんが——ドイツの大統領から直接家へ電話がかかってきた、朝方に。

「奥田さん、私はドイツの大統領です。今度、あんたに勲章を差し上げたいけれども、その勲章を上げるについては、近くにある神戸の総領事館がいいか、東京の大使館がいいか、どちらがいいか決めてほしい」

「それなら、私はドイツ大使館でお願いします」

「オーケー、ではそうするわ」

なんて。びっくりしましたよ。その頃は大使公邸でお招きになる。その時に好きな人と呼んでいいと言う。だから、僕は公で呼んだのは、最高裁の同じ第三小法廷で一緒に審議をした仲間三人だけです。それ以外は全部、東京の僕の友だちとか、妻の大阪の八尾以来の友だち、そういうプライベートな人をたくさん呼んで、物凄く和やかな懇親会をやった。あとから、僕は最高裁を辞める時に御礼の挨拶に行った時に、向この大使が、

「未だかつて、ああいうお祝いの会をするのに、あんたの会ほど和やかな素晴らしき会はなかったよ。他はみなお偉方が来るから、しゃっちよこぼっていかにもセレモニー的な、儀礼的なことで終わってたけど、あんたの会だけは全然ちがつて、和やかで素晴らしかった」

と言われた。



●『キリスト道講話集』第一巻

（市村） それでは、話は尽きないけれども最後に、この話とは別ですけれども、今度、先生の講演集（『キリスト道講話集』第一巻）を作っているわけですから、もし最高裁の関係の方とか、本を送っていいような方たちの名簿がありましたら、東京でもその送る作業をお手伝いしたいと思うのですが。

（奥田） 私は、最高裁時代の仲間で送りたいのはいませんね。というのは、やっぱり最高裁での仲間というのは法律をとおしての仲間で、本当に内面的な問題について深く語り合うとか、そういうのは誰一人いませんでした。だから、そんな連中に送ったって、本当にありがたく思ってくれないとおもう。だから、もし送るとしたら、もっともっとそういう内面的なことについてわかってもらえる人でないと、送りたいくない。今は、思い浮かぶのは二人、三人はいますけれども、それ以上は思い浮かばないですね。どうしても、私の公の繋がりとというのは、そういう公の所を抜け出てプライベートな面で心の繋がりができるという関係にはなれなかったですね。

（市村） お仕事柄、宗教色を出してはいけないような雰囲気もあったんでしょうか？

（奥田） 仕事はもちろんそうですけれども、仕事だけではなくやっぱり、最高裁の裁判官をやるような方は本当の意味で、キリストにすぎるとか、何か自分を超えたところに救いを求めるという、そういう方が少ない。つまり、別な言い方をすると、自信がある。

「私は私で結構やっていきます、独立独歩で」

と。そういうふうな方がやっぱり多かったのではないかな。それは僕からしたら淋しいですけれどもね。それも各人の生き方の問題だから。

（市村） 教え子さんたちの同窓会なんかではいかがですか？

（奥田） 教え子で？ それは私の大学時代の教え子の会は今も続いている、「奥田会」という会はある。京大は25年間やってきましたし。京大が主ですね。あとは、同志社のときの教え子の会というのはそんなにないですね。どっちかというところ、京都大学で25年間ゼミナールを持ちましたから、そのときの教え子たちが今も会をやってくれています。そういうところでは割に私は自分の宗教的な面もちゃんと話したりもしますから。その中でこの子には上げたいという、そういうのが何人かいるかもしれない。やっぱり、そういうことを本当に知りたと思うてくれる人なら読んでくれるけれども、そこまで思っていないのに送っても、それは却って迷惑ではないかと。たとえば今度、奥田会があったら、

「実はこんな本を作りたい。では自分も読んでみようかな、欲しい、と仰る方は、その送り先を書いてくれたら、そのお世話をしてくれる方から送り届けるように自分は手配するから」



とか、そういうふうの一つクッションを置いてでないと、「猫に小判」になってしまふ。やつぱり、この領域というのは相当深い領域ですから、上っ面のこの世の付き合いではない。もう一つ深いところで心の繋がりができる人でなければ、「猫に小判」という言葉があるのとおり、それは福音書自体の中にそういうことが書いてありますもの。

だから、奥田会の時に持って行って、こういうものを東京の新宿集会の方々が作ってくれた。これはただの奥田の想い出話を書いてあるのではなくて、非常にやつぱり人生の大事なことを書き記してある貴重な文書だから誰でもがというわけにいかない。やつぱりそういうことに關心を持つて、それなら飛びつきたいという方ではないと、消化不良になって邪魔になるだけで、それでは作ってくれた人にも申し訳ない。サンブルがここにあるから、手に取ってみて、「ああこれは欲しい」と思えば、メモしてくれたら、送るようにするとか。やつぱりワンクッションおかないとね。

これは何についても言えることなんです。バラまいたらいいというものではない。小池辰雄先生の本にしてもそうだと思う。何か小池先生が、ある女性の方に本を贈られたら、全部それが捨てられるようなことになったということをちょっと聞いたことがあるんです。先生は気前がいいから、いつも気に入ったらパツと贈ったりなさるけれども、向こうはそうは受けとつていない。だから今度、私の場合だつて、心をこめて作ってくれたものを、やつぱり本気で受けとつてくれる人にだけ受けとつてほしいと、そういうふうに思います。いや、値打ちものだと思いますよ、今度できる本は。

●母親を白浜温泉旅行へ

お袋は英文学が好きだったということもありますし、それから何よりもお袋が置かれていた状況を考えたら、こっちは物凄く同情するわけですね。たとえば、夫婦関係にしても、趣味が全然ちがう。それは親父にとつても気の毒な話かもしれない。自分はそのようなヨーロッパのこと、アメリカのことに關心がないのにね。でも、お袋からすれば、そつちのほうに關心がある。合わないわけですね、もう趣味一つをとつても。だから、そういう夫君に対して婦君は英語のほうが好きだったから、そういう点で、ちよつとお袋に対する同情の気持ちがずーっと強かった。晩年は、お袋と親父は仲良く本当に過ごしていました。けれども、そこへ行くまでの間は、ずっと私はいろいろ苦労や、慰めと、そういう気持ちはずつといだいていましたね。

だから、あるときは、まだ研究助手になつて一年目くらいの時に白浜温泉へ連れて行ったりした。それもね——これはバレたらあかんですけれども、公費ですよ。出張旅費が出るんです——あの頃の会計制度というのはその年度に使い果たさないと、次の年度は額が減らされる。だから、年度末になると、「何とか使え」と事務局長が言う。使えと言われたつて、何に使つていいのか。だから、「国会図書館に行くから



とか何とかウソツパチでも、書いたら金やるから使え」と言う。やっぱり使わなあかんと。

「どこへでも行つてこい。白浜でも何でもいい。行つて来い。行ったらそれでいいやんか」

「そんなら、母親をつれていきます」

といって、連れて行つたら、物凄く喜んでくれてね。そしたら、先生の奥さんに

「奥田さんはええことなされたね。そんな年取つて息子に旅行へ温泉に連れて行つてもらうなんて、そりゃ素晴らしいよ」

と言って、えらいうらやましがられた。そういう時代でね、今はそんなことはバレたら、それこそ国費の濫費、横領だなんだと言われるけれども、使わないと次の予算が減らされる、あの頃の会計制度は。だから、年末になると、使い切らないとダメだった。そういう時代に変な使い方をして、犯罪にも匹敵するようなことでございましたけれども。だから、せっせつと国会図書館で資料収集のためとか、そんな嘘っぱちなことを書いて、行く所は別な所へ行く。そんな時代だったんです、あの頃は。そんな時代だったからね、キリストさまにはお赦しいただかないと。

● 祈り

（市村）先生、最後にお祈りをしてくださいませ。

（奥田）主さま、今日はここで市村姉妹をお迎えして、素晴らしいひとときを過ごすことができました。どうぞ、今日の語らいをおして、また東京の皆様方の、またのちほどこの会話をお読みになる方も、あなたの豊かな恵みにあずかることができますように。また、東京召団の新宿集会の方々を、どうぞ、主さま、祝福してますます福音の証人としておん用いくださるうちにこいねがいたてまつります。

とりわけ、S兄弟が大事な役目を担っておられますが、どうぞ、これからも彼をおしてこの福音、特に小池辰雄先生をおして開かれた真の福音の道が世界中にまで広がっていくように、おん助けくださいますようにお願いいたします。

この恵みのひとときを感謝して、讃美と感謝と祈りを姉妹の祈りと共に聖名によって聖前にお捧げいたします。アーメン。

（市村）主さま、今日はこのような時間をお与えくださいまして、ありがとうございます。奥田先生に久し振りにお会いできましたして、貴重なお話を伺いまして、本当に楽しいひとときでございました。このお話がまた皆に伝えることができますように、お守りください。また、先生の講話集が、あなたさまが最善をお与えくださいまして完成し、一人でも多くの方にあなたさまの福音がその本をおして語られますように。すべてあなたさまがご計画してくださった講話集ですから、どうか、最善をお与えください。



京都召団の方たちの健康をまたお守りください。そして、京都召団の祈りの家がこれからますます用いられますように、どうか、お導きください。奥田先生が本当にこうして私達の前に歩んでくださっています。この大きな恵みを心より感謝いたします。どうか、奥田先生をますます強め、お守りくださいますように。まだまだあなたが、奥田先生にこの世での使命を与えてくださいますように、力強く歩んで行くことができますように、お守りください。言い尽くせぬ感謝と讃美、このお祈りを全能の主イエス・キリストの聖名にあつて聖前にお捧げ申し上げます。アーメン。

